

子どもの葛藤場面における保育者の働きかけ

—笑いに着目して—

How caregivers can help Children in conflict situations

—Focus on laughter—

笠原 麻衣子

Maiko Kasahara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：葛藤場面，笑い，働きかけ

Key words : Conflict scene, Laughter, Approach

1. 研究目的

本研究の研究課題名は、研究助成申請時は「子どもの葛藤場面における保育者の働きかけ—笑いに着目して—」であった。しかし、先行研究を整理していく中で、保育者が子どもを楽しませようとするような関りは、葛藤場面に限らず、子どもの姿や周りの状況に応じて、即興的に関わっているという整理に至った。また、笑いに着目してという副題に関しても同様に、保育者の関りは、ただ子どもたちを笑わせるためにやっているのではなく、状況に応じた保育者の関りにより、子どもたちが笑うなどの姿をみせるという結果に過ぎないのではないかと考える。したがって、保育者の関りによって、子どもが笑ったかどうかの結果を明らかにすることが保育者の専門性ではなく、状況に応じて、笑いを誘うような雰囲気、すなわち、楽しい雰囲気を作るような保育者の保育行為にこそ専門性があると考え。よって、現在は「保育行為にみられる保育者の遊び心」という研究課題として、保育場面を特定して保育行為を見ていくのではなく、対象とする保育者の保育を丁寧に見ていくことで、保育行為にみられる遊び心の意味を明らかにしたい。

2. 研究実施内容

「保育行為にみられる保育者の遊び心」という研究課題における先行研究の整理については以下に示す。

保育者が行う日常の保育行為の中には、保育者が意図的に、あるいは非意図的に、おどけたりふ

ざけたりしながら子どもと関わるようなことがよくある。本研究では、このような保育行為を、一旦、保育者の「遊び心」として見ていく。

保育者は、日常の保育の中で、なぜ「遊び心」をもった関りをするのだろうか。また、そのような保育行為は、保育にとってどのような意味があるのだろうか。このような、具体的な保育行為の意味を明らかにし、その役割を明確にしていくことは、保育者の専門性に寄与すると考える。

保育者は誰しも、子どもと関わることを楽しみたいと思ったり、子どもの笑顔を引き出したいとか、子どもの楽しい経験に繋げていきたいなどと思いながら保育をしているであろう。このような保育者の思いは、意図的な「遊び心」を持った関り方としてみられるのではないかと考える。また、保育者は子どもと共に日常を過ごす中で信頼関係を積み重ねている。そのような関係性においては、子どもの状況によって、即興的に、子どもの姿に共鳴し「遊び心」という保育行為を行う非意図的な「遊び心」というものも存在するであろう。

このように、保育行為には保育者の思いが明確に含まれる意図的な保育行為もあれば、子どもの状況に即興的に応じるような非意図的な保育行為があるのではないかと考える。

長年、現場で保育者をしてきた私は、いくつか「遊び心」と思われるような関りをしてきた。

一つ目は、子どもの葛藤場面においてである。私が新人だったころは、子どもが葛藤するネガティブな状況に同調して、子どもの関り方に行き詰まりを感じやすかった。しかし、自らがおどけた

りふざけたりするような関り方をしたことで、結果的に保育者の私が余裕を持って子どもに関わることができた。また、子どもが友達との間で葛藤する状況から気持ちが切り替わらないような場合は、保育者がおどけたりふざけたりすることで、子ども自身の気持ちが切り替わるようなことがあった。このように葛藤場面においては、膠着状態になってしまった保育者や子どもの気持ちを「遊び心」により、葛藤の矛先を変えることで、そこから抜け出すきっかけに繋がったと言えよう。

二つ目は、遊び場面においてである。保育者がおどけたりふざけたりすることで、保育者自身が楽しい気持ちになる。その保育者の楽しい雰囲気により子どもが巻き込まれ、遊びが盛り上がるようなことがあった。このように遊びの場面においては、保育者の「遊び心」により、子どもがより楽しく遊ぶ経験に繋がるようなきっかけになったと言えよう。

これら2つの状況においては、保育者であった私が自覚している場面での出来事のため、保育者が意図的に「遊び心」を持った関りとして見なすことができる。

先行研究においては、「遊び心」という言葉を使って保育行為の意味を明らかにしたものはない。しかし、「遊び心」と捉えられるような保育者の関りについて明らかにしたものはない。

田中(2019)は、登園場面において母子分離に葛藤する子どもの関りの中で、保育者の「ふざける行動」が子どもの気持ちを切り替えることに繋がったことを明らかにしている。また、水津(2015)は、子ども同士の葛藤場面の状況に応じて保育者が「ユーモラスな行動」をとることで、保育行為の機能の違いを明らかにしている。それは、葛藤場面の最中の保育行為では、子どもの興奮や緊張を緩和させることに繋がったとし、葛藤場面の終結後の保育行為では、子どものネガティブな気持ちを切り替えることに繋がったとしている。これらの先行研究から、保育者の「ふざける行動」や「ユーモラスな行動」という保育行為により、子どもの葛藤する気持ちが切り替わったことが明らかになり、私の事例で言う、葛藤する子どもにおいて、保育者の「遊び心」が、子どもの気持ちを切り替えていることと同様な意味を持っているであろう。

また、大田ら(2010)は、一斉活動の場面において保育者が「笑い」を用いた関りをする中で、子どもがその活動に集中して楽しめたことを明らか

にしている。このことは、私の事例で言うと、保育者が「遊び心」をもって楽しい雰囲気を作り出すことで、子どもがそこに同調し、楽しい雰囲気になり巻き込まれ、その場を楽しむ姿になったことと同じようなことが起きたのだらうと考えられる。

これら先行研究からは、保育者は、葛藤場面では子どもの気持ちを切り替えたい意図があり、一斉保育の場面では、活動に集中してくれるといいなという保育者の意図により、「遊び心」という保育行為を行っていることが考察される。

しかし、保育者の「遊び心」という保育行為は、葛藤場面や一斉活動の場面など、特定された場面に直面したことで見られる関りなのであろうか。また、「遊び心」という保育行為は、保育者が意図的に行うものばかりなのであろうか。

保育者は、日々の保育の中で、場面に応じて保育行為を選んでいくわけではなく、目の前の子どもの姿に応じるために保育行為を行っている。そのため、保育行為の意味を見ていくのであれば、ひとり一人の子どもを、保育者はどのように捉え、保育行為として表出されているのかをみていく必要があると考える。

倉橋(2008)は、「こころもち」という題目で、その子の今の心もちにのみ、今のその子があるため、子どもの側にいる人、すなわち保育者は、今の子どもの心もちに共感することが必要であることを述べている。それは、今目の前にいる子どもの状況によっては、保育者の意図的な関りだけではなく、子どもの状況に応じるように関わり、非意図的な保育行為としてみられることもあるのではないかと考える。

また、倉橋の「こころもち」を受けて、浜口(2010)は、心もちは情緒を喜怒哀楽にわけて、そのどれかの言葉で済ませる認識の対象ではなく『深く見通す感覚』だと述べている。さらに、水津(2018)は、保育者が子どもを見る時には、頭の中で理解の仕方に偏ることを差し控えて、それでは掬い切ることのできない心もちを受容的に知覚してこそ、その本質に迫り得ることを言い表していると述べている。これらから、保育者は子どもの心もちという、目では知覚しづらいものを察して関わりすることが大切であり、保育行為もまた、表面的に捉えられるような、知覚されることだけが行為の意味ではないことだと考える。

このような保育行為の一つに、保育者が「遊び心」を持った関りがあるのではないかと考える。

したがって、本研究では、日常的に行われている保育者の「遊び心」という保育行為を丁寧に見ていき、「遊び心」というものが、日常の保育のどのような状況において、保育者の保育行為として見られるのか、そして、その意味を明らかにしたい。

これら先行研究を基に、研究対象とする保育者の予備調査として、観察とインタビューを行った。現在は、その記録を基に、本調査に向けて、場面を切り取る根拠を整理したり、インタビュー内容などを整理している。

3. まとめと今後の課題

今後は、予備調査で整理したことを基に本調査に入る。映像記録からだけでは捉えきれない子どもと保育者の関係を、保育者のインタビューから補いながら、日常的に行われている保育者の「遊び心」という保育行為の意味を明らかにしていく。

引用参考文献

- [1]田中あかり. 新入園児 Y の登園場面の葛藤に寄り添う幼稚園教師の行動-情動へのアプローチに注目して-. 保育学研究. 2019, 第 57 巻, 第 3 号, pp.20-31.
- [2]水津幸恵, 松本博雄. 幼児間のいざこざにおける保育者の介入行動-気持ちを和ませる介入行動に着目して-. 保育学研究. 2015, 第 53 巻, 第 3 号, pp.33-43.
- [3]大田紀子, 牧亮太, 山崎茜. 笑いをを用いた保育に関する研究-手段として用いる笑いの有用性の検討-. 幼年教育研究年報. 2010, 第 32 巻, pp.133-139.
- [4]倉橋惣三. 育ての心 (上). フレーベル館, 2008, (倉橋惣三文庫, 3-4)
- [5]浜口順子. 『こころもち』に近づくために. 幼児の教育. 2010, 第 109 巻, 第 1 号, pp.9-11.
- [6]水津幸恵. 倉橋惣三における心もちへの『共感』-ノルディングスのケアリング論を視点として-. 子ども学研究紀要. 2018, 第 6 号, pp.21-31.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (DB2208)「子どもの葛藤場面における保育者の働きかけ-笑いに着目して-」を受けたものです。